海の道むなかた館
令和５年度館長講座
「筑紫・豊（前）の四つの窓」

令和５年５月13日(土)

海の道むなかた館長　西谷　正

第２回　Ⅰ．玄界灘・響灘（２）「聞」国の想定

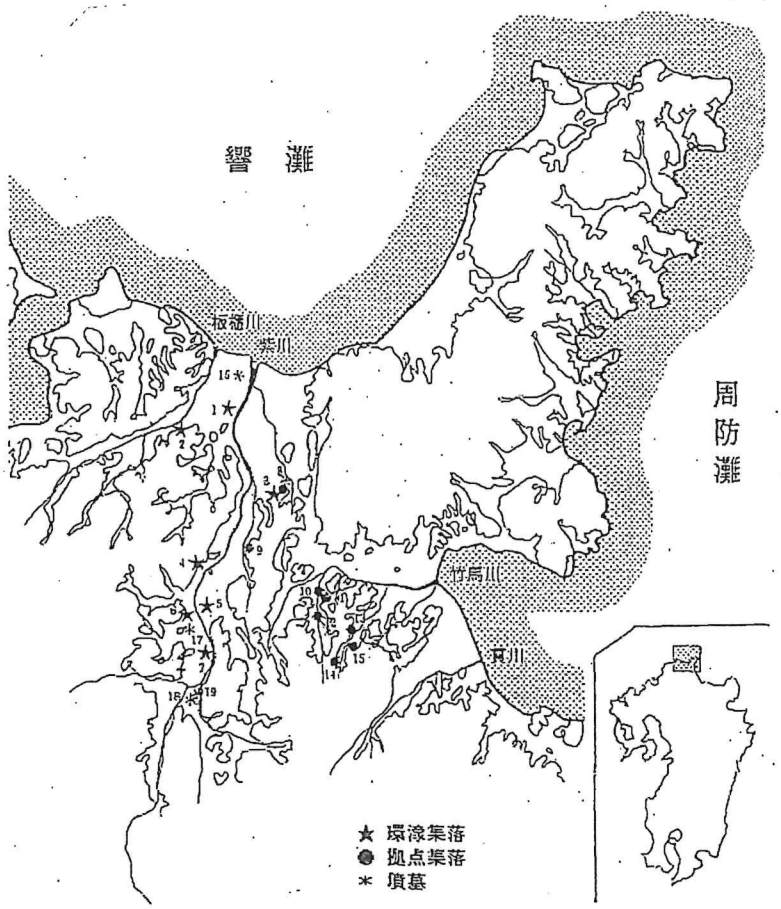
Ⅰ　はじめに
　紫川流域に国はあったか

Ⅱ　紫川流域における弥生時代の遺跡

Ⅲ　「企救」国の呼称について

Ⅳ　「企救」国の検証

Ⅴ　おわりに
　「企救」改め「聞」国へ



北九州市域の環濠集落・墳墓分布

3. 重留遺跡　4. 寺町遺跡　7. 伊崎遺跡　8. 城野遺跡　10. 金山遺跡
14. 長野尾登遺跡　16. 小倉城二ノ丸家老屋敷跡遺跡　17. 郷屋遺跡

（『北九州市埋蔵文化財調査報告書』第433集より）

「企救」国の想定

西谷　正

1. はじめに

去る平成8年（1996）の一月下旬に、北九州市小倉南区の重留遺跡において、弥生時代後期の竪穴住居跡の内部から、初めて広形銅矛が一本検出された。広形銅矛はこれまで、ほとんど集落から離れた丘陵斜面や谷頭の近く、あるいは、海辺などで出土しており、住居跡からは出土例がなかった。そして、住居の床面を掘り込んで埋納したまま元位置を保った状態で出土したことから、細心の注意を払った調査が行われ、埋納過程を知ることができた。さらに、広形銅矛出土地の空白地帯でもあった紫川流域で初出ということもあって、その意味を考えたところ、邪馬台国時代の紫川流域に、「企救」国とも仮称すべき一つの国が存在した可能性を指摘したことがある[(1)]。その後、重留遺跡の周辺において、重住遺跡や城野遺跡が調査され、また、紫川流域の各地で重要な知見が得られるようになった。

とくに、3年前の平成21年度には、城野遺跡において、弥生時代終末期に当たる九州では最大級の規模を持つ方形周溝墓が検出されて注目を集めた。続いて一昨年、同じ城野遺跡の別地点で玉製装身具の製作工房跡が発見され、一段と関心が高まっている。そこで、この機会に改めて紫川流域の弥生時代について検討することにした次第である。

2. 紫川流域における弥生時代の遺跡

いま述べた広形銅矛が出土した重留遺跡は、現在の北九州市域の中心部を北流して響灘に入る紫川の中流域に当たる（第1図）。

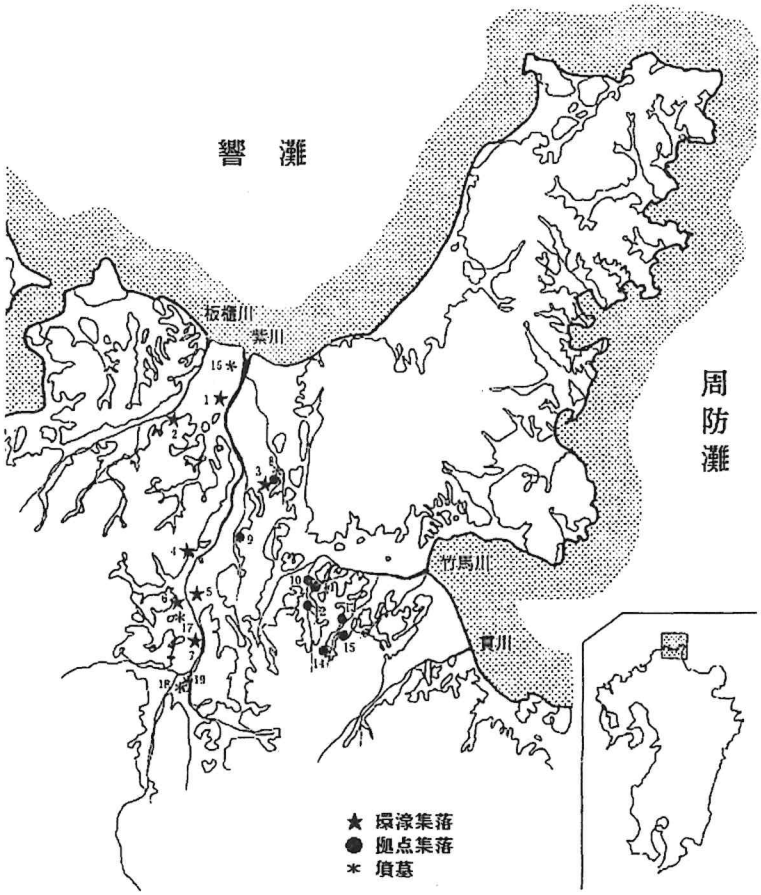
紫川の中流域では、縄文時代晩期後半（弥生時代早期）から、稲作が開始されている。北九州市小倉南区の貫川遺跡[(2)]から出土した石包丁は、その証左となろう。その後、弥生時代前期には、稲作が定着する。小倉南区の石田遺跡[(3)]では、縄文時代晩期後半～弥生時代初頭の水路に関連する杭列やイネ属と水田雑草類が検出されている。前期でも後半から中期前半にかけてのころになると、集落遺跡は爆発的に増加し、後期へと継続する。しかも、前期後半の小倉南区の寺町遺跡[(4)]のように、紫川を見下ろす標高31mの丘陵地に、1.9haという大規模な環濠集落が出現している。ここでは、環濠内に乱杭列の痕跡を示すものと思われるピット群があったり、環濠南側斜面の土壙などから投弾と推測されるつぶて石が28個も出土したことは、当時の緊張した集落間の社会状況を反映する武器として注目したい。中期では、小倉南区の寺町遺跡[(5)]のように、磨製石斧製作センター的な遺跡や、小倉南区のカキ遺跡[(6)]における分銅形土製品を出土して瀬戸内西部地域との交流を物語る遺跡など、特色のある遺跡群が知られる。わけても青銅器の出土は重要である。紫川流域ではないが、西方の八幡西区永犬丸の松本遺跡[(7)]では、弥生時代前期末から中期初めにかけてのころに当たる青銅器の鋳型と、青銅溶解時に火を受けて焼けた炉壁も伴出しているので、広く北九州市域における青銅器製作開始をうかがわせる。そ

のような背景のもと、小倉北区の区役所跡地で、小倉城二ノ丸家老屋敷跡遺跡の箱式石棺墓からの細形銅剣を出土する結果をもたらしたといえよう。

以上のように、ここでは紫川流域における弥生時代社会の成立から発展の時期にかけての特徴的な遺跡群を紹介した。そこで、つぎに、紫川流域に想定される国の問題を取り上げる。

3. 「企救」国の呼称について

まず、「企救」国といった場合の「企救」について、かんたんに解説しておこう。ここで、企救というのは、律令時代の豊前国企救郡に由来する。文献史料によると[8]、『続日本紀』天平12年（740）9月24日の条に見える企救郡が郡名としての初見である。考古資料では、北九州市小倉南区の長野A遺跡[9]から、奈良時代の「企救」銘墨書須恵器が出土している。企救郡はまた、『三代実録』元慶2年（878）3月5日の条に見えるように、規矩郡とも書かれた。このことは、小倉南区の御祖窯跡出土の「規矩」銘墨書須恵器からも裏づけられ、そして、用例が9世紀末までさかのぼる可能性がある。一方、『和名類聚抄』には企救郡・岐久、および、『延喜式』民部上の頭注には「企救郡今書規矩郡」とあるので、平安時代には企救郡と規矩郡の二つの書き方があったことになる。ここでは、奈良時代の文献史料と考古資料の用例にしたがい、便宜上、企救を用いることにする。



第1図　北九州市域の環濠集落・墳墓分布

3. 重留遺跡　4. 寺町遺跡　7. 伊崎遺跡　8. 城野遺跡　10. 金山遺跡
14. 長野尾登遺跡　16. 小倉城二ノ丸家老屋敷跡遺跡　17. 郷屋遺跡

（『北九州市埋蔵文化財調査報告書』第433集より）

ところで、律令時代に企救という二文字が用いられたが、さかのぼって一文字が当てられていた可能性が知られる。それは、『日本書紀』雄略天皇18年（474）8月10日の条に登場する筑紫聞物部大斧手は、豊前の聞すなわち企救に関係する人物と[10]推測され、したがって、企救が古く聞と呼ばれていたことが推測される。聞の用例は、『万葉集』巻7における「豊国之聞之浜辺」のほか、3カ所で聞が見られる。『万葉集』ではまた、巻16に見られるように、「豊国企玖及池」[11]なども知られる。このように見てくると、古墳時代から奈良時代にかけて聞と呼ば

れていたものが、奈良時代から平安時代には企救郡と称され、さらに平安時代には規矩郡とも表記されていたことになる。ちなみに、中世から近世には規矩・企救郡、そして、近代になって改めて企救郡と呼ばれるようになった。

さて、『和名類聚抄』には、企救郡は長野・蒲生の二郷となっている。しかし、条里制遺構を見ると、現在の板櫃川・紫川・竹馬川・貫川の流域に、方位を異にする7地区が認められるところから、本来の郷名が脱漏している可能性も指摘[12]される。

ここで、律令時代の一、二郡が「魏志倭人伝」や『漢書』地理志に記載される国にほぼ対応することは、すでに早くから指摘されてきた[13]ところである。その国とは、もともと漢の地方統治制度としての郡国制度に基づくものである。したがって、『漢書』地理志に倭すなわち日本列島の百余国が登場するということは、倭の国々が漢の冊封体制下に編入されたことを意味する。その結果、「楽浪（郡）海中に倭人あり。分かれて百余国を為す」と記録されたわけである。このことは、日本列島とりわけ北部九州において、銅鏡・銅銭・ガラス璧・金印など漢の文物が出土することからも裏づけられる。

そのような国には、倭人伝や「魏志韓伝」に見える国邑[14]があり、また、韓伝に見える邑落があった。ここで国邑は、考古学上の遺跡でいえば、河川流域平野のような地域の拠点もしくは中心の集落に当たり、しばしば大規模で環濠を伴うことがある。そして、邑落は国邑を頂点として、地域社会を構成する周辺あるいは衛星集落である。このことを、前述のとおり国が律令時代の郡に対応するとして、国邑に当たるところを強いていえば郡衙であり、また、邑落に当たるのが郷であろう。

そこでつぎに、律令時代の企救郡域に、「企救」国とも呼ぶべき一つの国を想定して、考古資料から、この問題を検証する。

4. 「企救」国の検証

さきに、企救郡域で重要な位置を占める、紫川流域における稲作社会の定着と展開について少し言及したが、弥生時代前期後半になると、小倉南区の蒲生寺町遺跡[15]において、この地域ではじめて環濠集落が検出され、1.9ha の規模と推測される。つぶて石 28 個の出土も戦闘用の武器の可能性を示唆する。

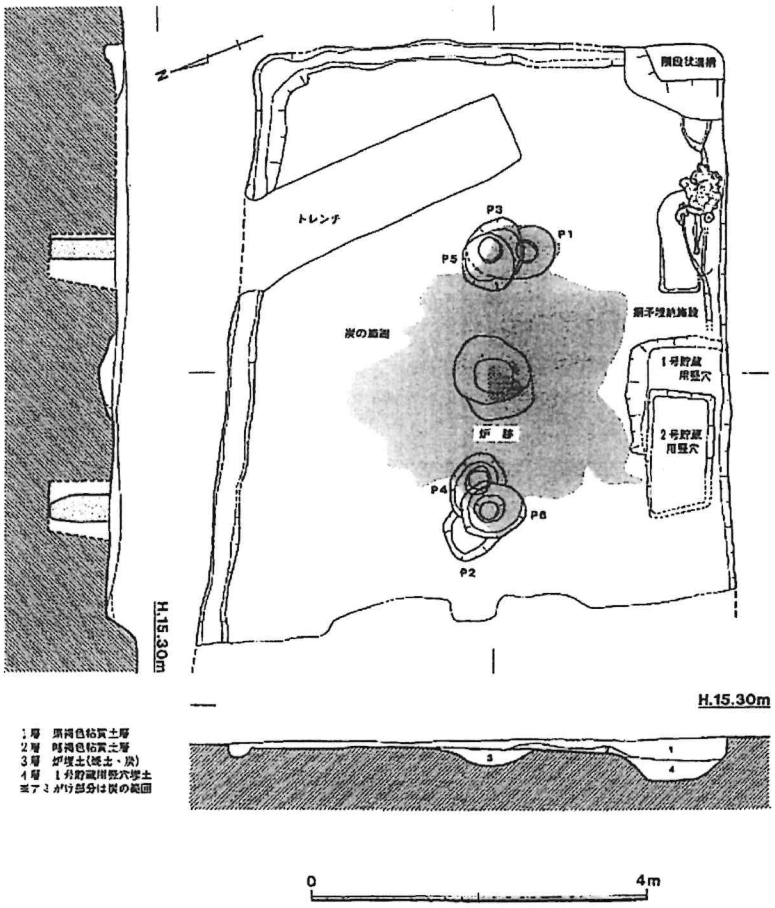
そのころと相前後して青銅器文化が登場する。このこともすでに触れたことではあるが、八幡西区の松本遺跡[16]において、前期末から中期初にかけてのころの青銅器鋳型と炉壁を検出している。その時期の製品は、小倉北区の小倉城二ノ丸家老屋敷跡遺跡[17]で弥生時代中期初の箱式石棺墓から出土した細形銅剣が知られる。長さ 36cm の銅剣は、その付近一帯で発見された 4 基の石棺墓群のうち、長さ 2.56m という最も大きな石棺墓から出土し、管玉も共伴した。弥生時代前期後半から中期前半にかけてのころ、北部九州各地の律令時代の郡域において 1 個所ぐらいの割合で、青銅器を副葬する墳墓が営まれている。企救郡の近くでいうと、宗像郡域における宗像市の田熊石畑遺跡[18]が特筆される。ここでは、東西 8m、南北 14m の範囲内で、中期前半の割竹形木棺を内部主体とする墳墓が 9 基検出されたが、そのうちの 6 基から合計 15 本の青銅製武器（細形剣・矛・戈）や多数の勾玉・管玉が出土した。未調査部分には、さらに埋葬主体や副葬品が含まれることもわかっている。そのような青銅器を副葬する墳墓に対して、首長墓と評価し、その背景に農業共同体の形成[19]を想定したことがある。つまり、企救郡域において、中期初のころ、前述の寺町遺跡で見られたような環濠集落を中心とする農業共同体

の形成と、小倉城二ノ丸家老屋敷跡遺跡の箱式石棺墓に見られたような首長墓の出現の様相を見い出したいのである。

弥生時代中期後半に入ると、前述のように、北部九州各地で漢の文物が出土するが、それらの文物は、いま見たような農業共同体が、紀元前 108 年に朝鮮半島北西部に設置された楽浪郡を通じて漢帝国に朝貢して冊封を受けた際に入手したものと考えられる。そのような政治過程を経て、農業共同体は国として、また、共同体首長は王として、漢帝国から認証されたのであった。中期後半には、紫川流域において、おそらく奴国や伊都国と同様に、「企救」国が成立していたと思われるが、国邑や王墓の遺跡は現在のところ未発見である。ただ、小倉南区の守恒遺跡[20]において、中期の弥生土器とともに、前漢の五銖銭が伴出していることは見過ごせない。

ところが、弥生時代後期になると、種々の顕著な様相が現われる。まず、小倉南区の重留遺跡が注目される。遺跡は、標高 15m 付近の南北 200m、東西 150m 余りの狭い丘陵上に立地する。平成 2 年度から 5 地点に分けて、開発工事に伴う発掘調査が実施された。その結果、弥生時代では、後期後半の竪穴住居跡 30 軒以上と掘立柱建物跡 10 棟以上が検出された。そのうち第 2 地点[21]では、丘陵の頂部西北端にあり、検出された住居跡群の中で最も高い場所に位置する 1 号竪穴住居跡において、広形銅矛が埋納されていた（第 2 図）。住居跡は、東西約 8m、南北 6m、面積 48 ㎡ほどの規模を持つ大型であるが、住居内部の南壁沿いの床面に設けられた土壙から、銅矛が埋納されたままの状態で検出されたのは、はじめてのことであり、慎重かつ綿密に検出作業が進められた（第 3 図）。その結果、銅矛の埋納遺構は少なくとも 1 回掘り出されて、2 回埋納されていたことがわかった。これまでに知られていた銅矛埋納遺構に関しては、祭祀を行うに当たり、そのつど掘り出して使用したという見解があったが、そのことがはじめて裏づけられたことになった。

一方、竪穴住居跡内部から、日常的な生活用具である土器と石器がかなりの量で出土していることから、ここが日常の生活空間でもあったことも



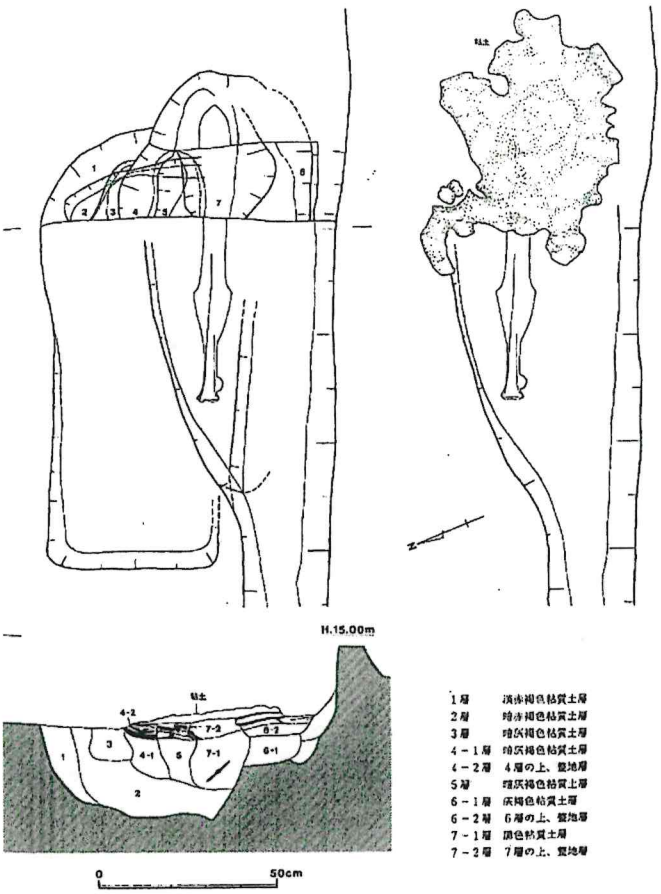
第 2 図　重留遺跡第 2 地点 1 号竪穴住居跡実測図

（『北九州市埋蔵文化財調査報告書』第 230 集より）

知られる。したがって、ここに居住した人物は埋納銅矛の管理者であるとともに、銅矛祭祀の司祭者であった可能性が高いといえよう。その場合、銅矛という稀少性からいって、重留遺跡に見るような一つの集落、あるいは、それを越えた地域における首長層であったと考える。

つぎに、終末期になると、地域の中心は、重留遺跡の北側に谷地を挟んで城野遺跡の場所へと移っていった（第4図）。城野遺跡は、標高約14m付近を最高所とする東西約220m、南北約120mの狭い丘陵上に立地する。ここでまず注目されるのは、丘陵西端で、集落の西端部でもある場所において、方形周溝墓が見つかった[22]ことである（第5図）。しかも、南北23m、東西16.5m以上という九州で最大級の規模を持っている。さらに、一つの墳墓に南北に2基の小型箱式石棺が同時に埋葬されていた（第6図）。そのうち、南棺では鉄刀子の副葬品と碧玉管玉6点・メノウ棗玉1点からなる装身具が出土し、また、小型短頸壺が供献されていた。そして、南棺の西側小口部から頭蓋骨と下顎骨が出土したが、4～5才の幼児と推定されている。性別に関しては、判定が可能な年令に達していないため不明といわれる。なお、棺内全体にわたって赤色顔料が厚く敷かれていたが、とくに頭蓋骨が安置された西側小口部には辰砂を枕状に敷かれていた。また、北棺からは鉄鉇が出土した。大規模な方形周溝墓と貴重な辰砂の使用などから見て、被葬者については幼くして死亡したが、首長層もっといえば王族の一人であったと推測する。なお、南棺の頭部側小口板石内面下位に、浅い線彫りの絵画の存在[22]が問題提起され、『周礼』に登場する方相氏との関連が指摘[23]されている。

城野遺跡の方形周溝墓より時期的に先行すると考えられるものに、小倉北区の小倉城下屋敷跡遺跡[24]出土の銅鏡がある（第7図）。銅鏡は、砂丘上面に堆積した黒褐色砂質土層（中世層）の下から出土した。その出土地点は、標高約3mの砂丘上では最も高所に当たり、そして、周辺に石材の一部が散乱していたことや、そこから後期後半の高坏片が出土した。そこで、もともと箱式石棺に銅鏡と高坏が副葬されていた可能性がある。銅鏡は、中国からの舶載品で長宜子孫内行花文鏡である。しかも、銅鏡は、高級絹織物である羅で包んだ上、さらに平絹で包んでいた。こうなると、おそらく銅鏡を副葬した墳墓は王墓であり、被葬者は王であったと推測する。



第3図　重留遺跡第2地点1号竪穴住居跡銅矛埋納施設実測図

（『北九州市埋蔵文化財調査報告書』第230集より）

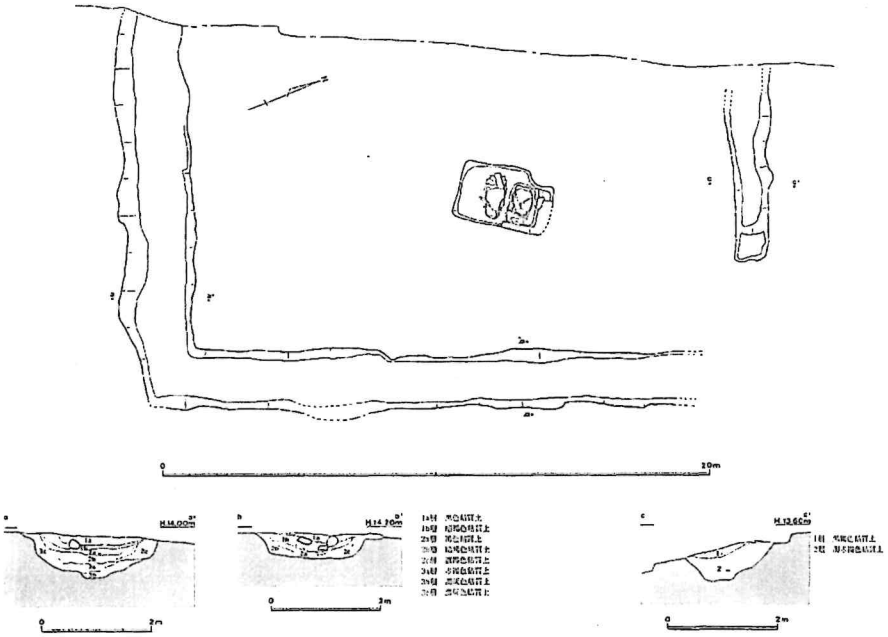
ところで、城野遺跡の西南方で、

第 4 図　城野遺跡・重留遺跡・重住遺跡の位置

(城野遺跡発掘調査事務所，2010『発掘ニュース』75 号より)

重留遺跡の東方に、それぞれ谷地を挟んで重住遺跡[25]が位置する。ここでは、後期後半～終末の竪穴住居跡が 11 軒検出されていて、重留・城野両遺跡の集落からの分村的性格が推測される。ちなみに、重留・城野遺跡は、それぞれ広形銅矛祭祀と方形周溝墓という顕著な遺構の存在から考えて、上述の国邑の遺跡の可能性が高い。もっとも国邑とした場合、王の居館などの重要建物がなくてはならないが、いまのところ未検出である。ただ、小倉南区の上徳力遺跡における大規模に掘削された溝や掘立柱建物に対して、首長層の居館の可能性が指摘されている[26]。そして、重住遺跡は、やはり上述の邑落群の一つの遺跡に当たるであろう。

邑落の遺跡といえば、小倉南区の伊崎遺跡[26]も重要である。ここの第 1 地点 4 区・5 区において、弥生時代後期終末古段階の環濠が検出された。その範囲は、東西 160m、南北 200m にわたる。環濠と重複するものも一部で見られるが、竪穴住居跡は 34 軒検出されている。出土遺物で注目されるのは、環濠内から大量の土器とともに投棄されたような状態で、小形の仿製内行花文鏡が出土した点である。伊崎遺跡は、紫川中流域の左岸に立地し、木製鍬や未成品を含む多量の石庖丁などの出土から見て、一般的な農耕村落であったろう（第 8 図)。



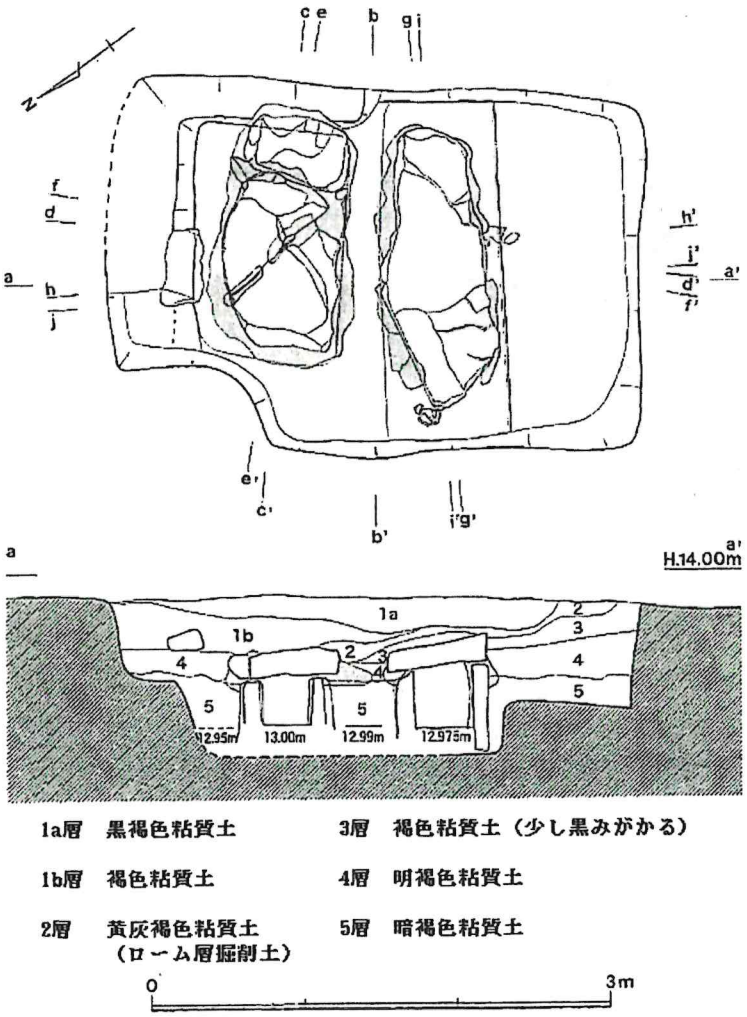
第 5 図　城野遺跡方形周溝墓実測図

(『北九州市埋蔵文化財調査報告書』第 447 集より)

一方、弥生時代後期終末のころ、集落内で

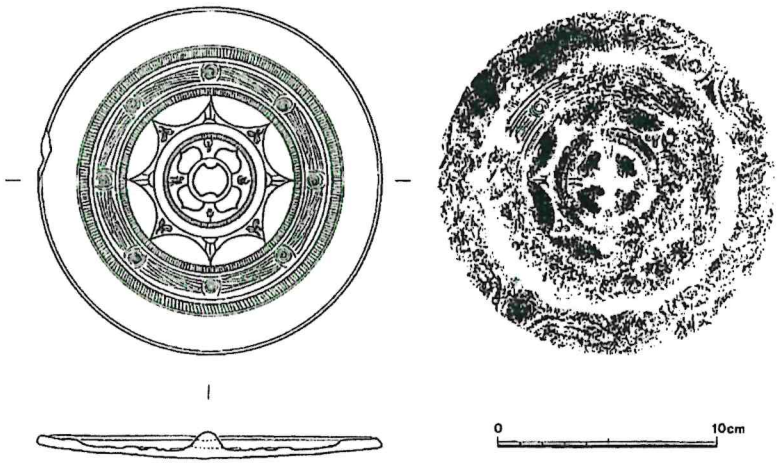
各種の手工業製品を製作する邑落の遺跡が知られる。たとえば、小倉南区の下徳力遺跡[27]では、第3地点の1号竪穴住居跡内から銅滓が3点出土している。これは、黄銅鉱系の酸化鉄[27]錬滓といわれ、後期終末の青銅器鋳造用の原料と考えられる。また、小倉南区の長野尾登遺跡の第3地点[28]では、弥生時代後期のものと推定される勾玉鋳型が出土している。これは、脚台付環形花形複数体鋳型に属するが、粘土製の円形品で5個分のガラス勾玉を一度に製作できる。さらに、小倉南区の城野遺跡では、上述の方形周溝墓の東方において竪穴住居跡群が検出された。そのうち、後期終末の H10・H16 竪穴住居跡は、水晶・碧玉製装身具の製作工房[29]と推定された。

小倉南区のカキ遺跡[30]では、石庖丁が 61 点出土しているが、後期中頃から後半頃と思われるものが含まれる。その中には、成形・細部調整・研磨・穿孔・刃づけといった石庖丁製作工程の諸段階を示すものがあり、この集落での石庖丁生産がうかがえる。さらに、この遺跡からは、後期後半になると、瀬戸内地方の各地から搬入された外来系土器が増加し、また、瀬戸内地方の特徴的な遺物の一つとしての分銅形土製品も見つかっている。そこで、吉備を中心とした瀬戸内地方各地からの移入者の存在



第6図 城野遺跡1号墓実測図

（『北九州市埋蔵文化財調査報告書』第447集より）



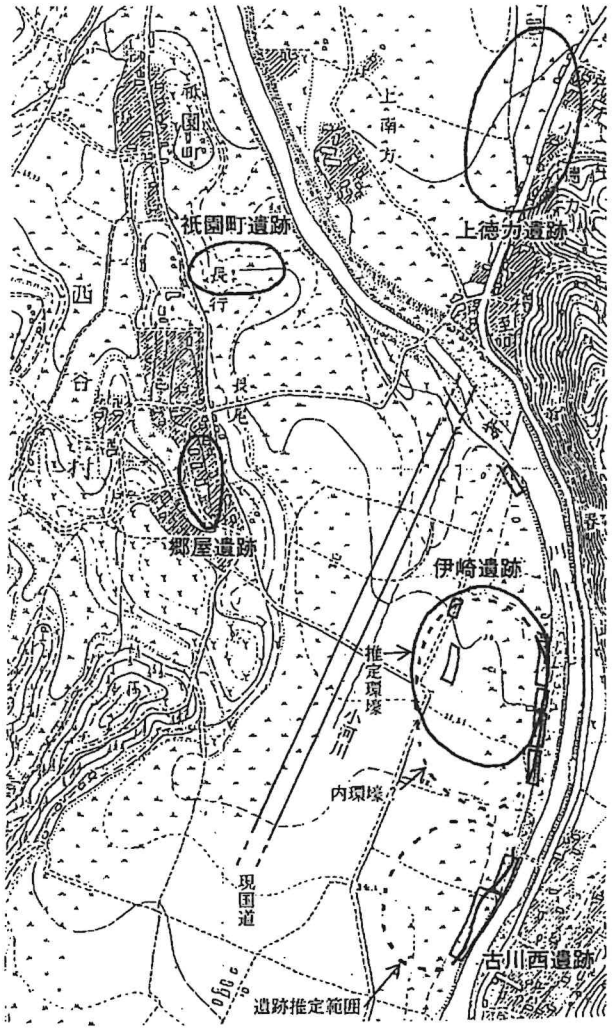
第7図 小倉城下屋敷出土長宜子孫内行花文鏡実測図・拓影

（『北九州市埋蔵文化財調査報告書』第222集より）

も指摘され、そして、カキ遺跡の集落が瀬戸内地方との交流拠点でもあったことが浮かび上がった。

さて、弥生時代後期後半の墳墓については、上で小倉城下屋敷跡遺跡における石棺墓と舶載鏡副葬の可能性、ならびに、城野遺跡における九州最大級の方形周溝墓に言及した。そのほか、小倉南区の徳力遺跡の第10地点[31]で検出された方形周溝墓は後期後半～終末頃の方形周溝墓の可能性が高い。同様に、小倉南区の砥石坂遺跡[32]は、北九州域ではじめて発見された方形周溝墓であるが、これは古墳時代初期まで時期的に下る。

弥生時代終末期前後の紫川流域における墳墓で、最も注目したいのは小倉南区の蒲生石棺墓群[33]である。ここでは、昭和29年（1954）の道路工事中の箱式石棺7基の発見に加えて、平成18～20年の道路工事に伴う墳墓88基の調査がある。墳墓群は、弥生時代前期末から古墳時代初めにかけて、土壙墓・石棺墓・石蓋土壙墓・配石墓などが約500年間にわたり築造し続けられた。そのうち、紫川に面した標高約50mの少し下がった斜面に、東西7.8m、南北3.3mのコ字形をした石列による区画を設け、その内部に5基の石棺墓群を配置していた（第9図）。5基の石棺墓群のうちほぼ中央に位置する37号墓では、ガラス製勾玉・小玉の頭飾りと碧玉製勾玉・管玉の首飾りからなる装身具を着装した被葬者に、中国・後漢の内行花文鏡が副葬されていた（第10図）。そのほか、37号墓周囲に営まれた34号墓と36号墓からは鉄製素環頭刀各1本が、また、30号墓からは鉄製刀子1本とオオツタノハ貝製の腕輪6個が出土している。このように当時としては貴重で豊富な遺物を集中的に出土した、この区画墓は有力首長層の墳墓と推定する。ちなみに報告書によると、区画墓内の石棺墓群に対して、37号・30号墓から36・34号墓を経て、27号墓へという築造順序が推測されている。



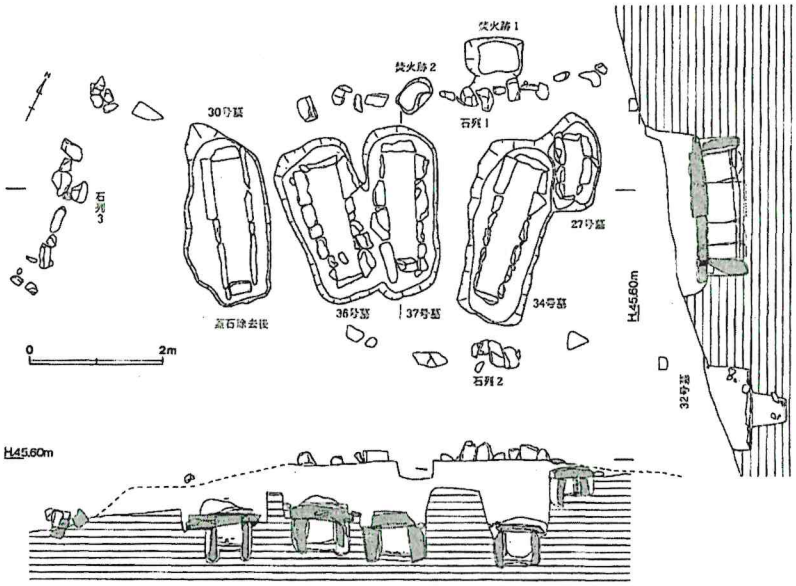
第8図　伊崎遺跡環濠推定範囲と周辺遺跡

（『北九州市埋蔵文化財調査報告書』第433集より）

蒲生石棺群から紫川を少しさかのぼると、小倉南区の郷屋遺跡[34]が位置する。この遺跡は、早く昭和35年（1960）に始まり、その後、昭和45年と昭和53年に調査が行われた。その結果、弥生時代終末期から古墳時代初頭にわたる、箱式石棺墓や土壙墓など30基ほどの墳墓群が認められた。そのうち、弥生時代終末期には、石蓋土壙墓2基と箱式石棺墓2基が築かれたが、鉄刀子や鉄鉈を副葬するものの、とくに顕著な様相は見られない。

それに対して、古墳時代初頭には、低い墳丘を有する郷屋古墳[35]が出現している。昭和35年の調査当時、すでに墳丘の大部分が消滅してい

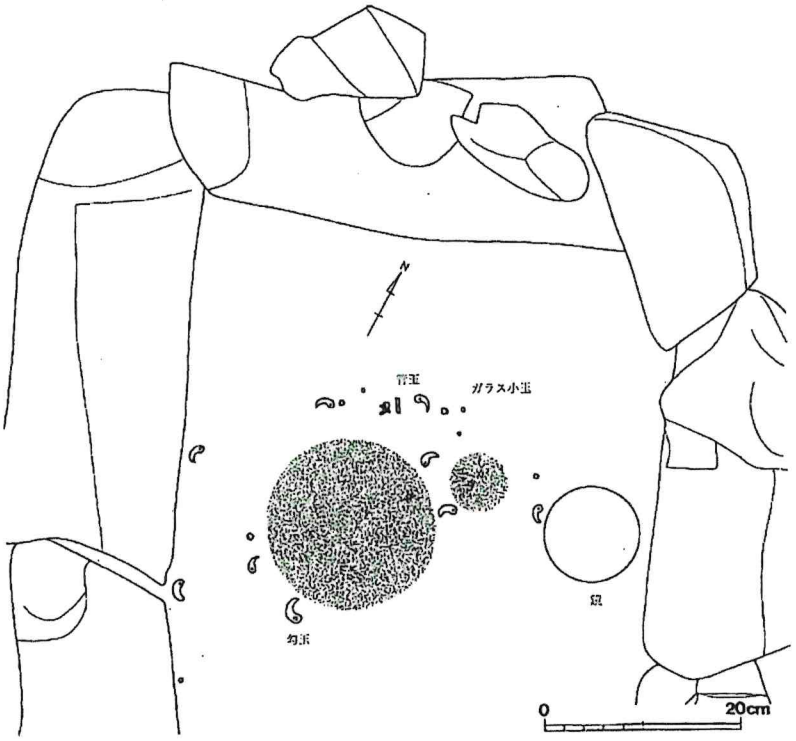
たが、もとは長径約 16m に、短径約 13m の楕円形もしくは不整円形の平面形をなし、高さ 2m 内外の低墳丘を有していたと推定されている。墳丘内部において箱式石棺 4 基が調査されたが、そのうちの 1 号石棺には、中国の後漢末から魏にかけてのころの四禽文鏡・鉄素環頭刀を副葬していた。そのほか、1 号石棺における鉄刀子・イモガイ製腕輪・碧玉製管玉、ならびに、4 号石棺における鉄鏃などの副葬が見られた。ここで、低いとはいえ墳丘を有することや、比較的豊富な副葬品の出土などから考えて、この古墳の被葬者は地域的な有力首長層の登場という歴史過程をうかがわせる。



第 9 図　蒲生石棺墓群配置図

（『北九州市埋蔵文化財調査報告書』第 425 集より）

一方、竹馬川流域においても、小倉南区の山崎八ヶ尻墳墓群[36]が知られる。ここでは、短く低い突出部が前方部状を呈する、全長約 13.5m の前方後円形の古墳が検出された。この古墳は、墳丘上で出土した二重口縁壺片から、庄内式新相段階もしくは布留式最古段階前後、いい換えれば、古墳時代初期に当たる。内部主体は、箱形木棺を相ついで 3 基埋納したと思われるが、墳丘東側に接して石蓋土壙墓 4 基が付属的に相ついで営まれた。そのうち、4 号石蓋土壙墓には、小形仿製内行花文鏡 1 面と鉄刀子 2 本が副葬されていた。この古墳は、墳丘を有し、銅鏡を所有するなど同時期の墳墓としては突出していることから、さきの郷屋古墳と同様に、地域の首長層の



第 10 図　蒲生石棺墓群 37 号墓遺物出土状況

（『北九州市埋蔵文化財調査報告書』第 425 集より）

墳墓と考える。

山崎八ヶ尻古墳の南方で、貫川上流域には御座1号墳が知られる。この古墳は、全長22mの前方後円墳で、内部主体としては木棺直葬と粘土槨の2棺が並置されていた。南棺の覆土上面からは、舶載の三角縁三神三獣鏡の破片が出土[37]している。御座1号墳に見られる、前方後円墳・粘土槨・三角縁神獣鏡という古墳の構造と副葬品は、ヤマト王権との関連をうかがわせる。このことは、律令時代の企救郡の西隣りの筑前国遠賀郡に関して、『日本書紀』仲哀天皇紀8年の条によれば、岡県主が登場する。そして、その墓域と考えられる前方後円墳を、古墳時代前期の全長57mを測る島津丸山古墳に見い出す。同じようなコンテキストで、企救郡の故地に岡県主の登場と、その墳墓としての御座1号墳を類推できるのではなかろうか。

5．おわりに

上述のとおり、平成8年の重留遺跡における広形銅矛の検出を端緒に、最近の城野遺跡における方形周溝墓や玉作り工房の発見を契機として、紫川流域を中心とした北九州市域における弥生時代後半期の地域社会の動向に関心をもってきた。そこで、これまでに調査されている遺跡群を検討することによって、『漢書』地理志や「魏志倭人伝」に見える国や王の形成と出現の過程を分析した。

その結果、弥生時代中期後半には、奴国や伊都国のような国や王、すなわち、「企救」国とも呼ぶべき国と、その首長である王が存在した可能性を示唆した。その後、後期終末には国邑と王墓の可能性を含む城野遺跡を頂点として、北九州市域の各地には、それぞれの小地域に営まれた邑落群と、その首長層の墳墓群が散在していたと推定した。

そのような社会状況を基盤としつつ、ヤマト王権の成立と、その象徴的な墓制である前方後円墳の波及という政治過程の進展の中で、御座1号墳のような前方後円墳が築造され、古墳時代が始まったと考える。

注

(1) 西谷　正，1996「重留遺跡住居跡から広形銅矛出土」『朝日新聞』2月9日付

(2) 前田義人（編著），1994『貫川遺跡8 －貫川都市小河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告7－』『北九州市埋蔵文化財調査報告書』第144集，財団法人北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室

(3) 梅崎恵司（編書），1990『石田遺跡（石田停車場線道路改良工事に伴う調査報告）』『北九州市埋蔵文化財調査報告書』第88集

(4) 柴尾俊介・山手誠治（編著），2003『寺町遺跡2（1～4区の調査） －長行田町線道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告2－』『北九州市埋蔵文化財調査報告書』第305集，財団法人北九州市芸術文化振興財団

(5) 木太久守（編著），2004『寺町遺跡3（第3次調査5区） －長行田町線道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告3－』『北九州市埋蔵文化財調査報告書』第306集

(6) 川上秀秋（編著），1995『カキ遺跡（弥生時代編） －九州縦貫自動車道関係文化財調査報告36－』『北九州市埋蔵文化財調査報告書』第161集

(7) 佐藤浩司（編著），1998『永犬丸遺跡群2（八反田遺跡・松本遺跡・永犬丸遺跡） －北九州市永犬丸・則松土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告2－』『北九州市埋蔵文化財調査報告書』第216集

(8) 2004『福岡県の地名』『日本歴史地名体系』第41巻，平凡社

(9) 山口信義・佐藤浩司（編著），1987『長野A遺跡2（Ⅱ・Ⅴ・Ⅵ区の調査）－九州縦貫自動車道関係文化財調査報告Ⅱ－』『北九州市埋蔵文化財調査報告書』第54集

(10) 注（8）

(11) 池邊彌，1966『和名類聚抄郷名考証』吉川弘文館

(12) 注（8）

(13) 岡崎敬，1970「『魏志』倭人伝の世界－対馬国より伊都国までー」『古代の日本』第3巻九州，角川書店

(14) 西谷正，2011「＜魏志倭人伝＞に見える国邑」『考古学ジャーナル』No.611，ニュー・サイエンス社

(15) 注（4）

(16) 注（7）

(17) 2000年6月2日付『西日本新聞』

(18) 宗像市教育委員会（白木英敏編），2009『概報　田熊石畑遺跡　福岡県宗像市田熊所在遺跡の発掘調査概要』『宗像市文化財調査報告書』第61集

(19) 西谷正，2010「首長墓の出現と王墓の形成過程」『九州歴史資料館研究論集』35

(20) 栗山伸司（編書），1986『守恒遺跡－国道322号線築造工事に伴う発掘調査－』『北九州市埋蔵文化財調査報告書』第50集

(21) 谷口俊治（編著），1999『重留遺跡第2地点－若園町線住宅移転用地整備事業関係埋蔵文化財調査報告1－』『北九州市埋蔵文化財調査報告書』第230集

(22) 谷口俊治（編著），2011『城野遺跡1（1A・1B区の調査）－国有地内埋蔵文化財調査業務に伴う埋蔵文化財調査報告1－』『北九州市埋蔵文化財調査報告書』第447集

(23) 谷口俊治，2010「弥生時代の葬送絵画」『ひろば北九州』No.293，財団法人北九州市芸術文化振興財団
設楽博己，2010「弥生絵画と方相氏」『史学雑誌』第119編第9号，史学会

(24) 宇野慎敏（編著），1998『小倉城下屋敷跡』『北九州市埋蔵文化財調査報告書』第222集

(25) 山手誠治，2007「重住遺跡」『埋蔵文化財調査年報』23，平成17年度，財団法人北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室

(26) 佐藤浩司（編著），2010『伊崎遺跡4区・5区－紫川（ふるさと区間）河道掘削工事に伴う埋蔵文化財調査報告4－』『北九州市埋蔵文化財調査報告書』第433集

(27) 栗山伸司（編書），1989『下徳力遺跡－都市モノレール小倉線及び国道322号線築造工事に伴う発掘調査－』『北九州市埋蔵文化財調査報告書』第79集

(28) 前田義人（編書），2004『長野尾登遺跡第3地点3－東九州自動車道建設に伴う発掘調査報告12－』『北九州市埋蔵文化財調査報告書』第322集

(29) 佐藤浩司，2011「北九州市城野遺跡の玉作り工房跡の調査」『魏志倭人伝の末盧国・伊都国－王（墓）と翡翠玉－』日本玉文化研究会北部九州地方大会（資料集）
佐藤浩司，2012「北九州市城野遺跡の玉作り工房の発見と今後の課題」本研究紀要第26号所収

(30) 川上秀秋（編著），1995『カキ遺跡（弥生時代編）－九州縦貫自動車道関係文化財調査報告書36－』『北九州市埋蔵文化財調査報告書』第161集

(31) 宇野慎敏（編著），1989『上徳力遺跡2－都市モノレール小倉線関係－』『北九州市埋蔵文化財調査報告書』第77集

(32) 前田義人（編書），1988『砥石坂遺跡・上清水遺跡（第 2 地点）・新池坂本遺跡（第 3 地点）－小倉南ハイランド関係埋蔵文化財調査報告書第Ⅱ集－』『北九州市埋蔵文化財調査報告書』第 71 集

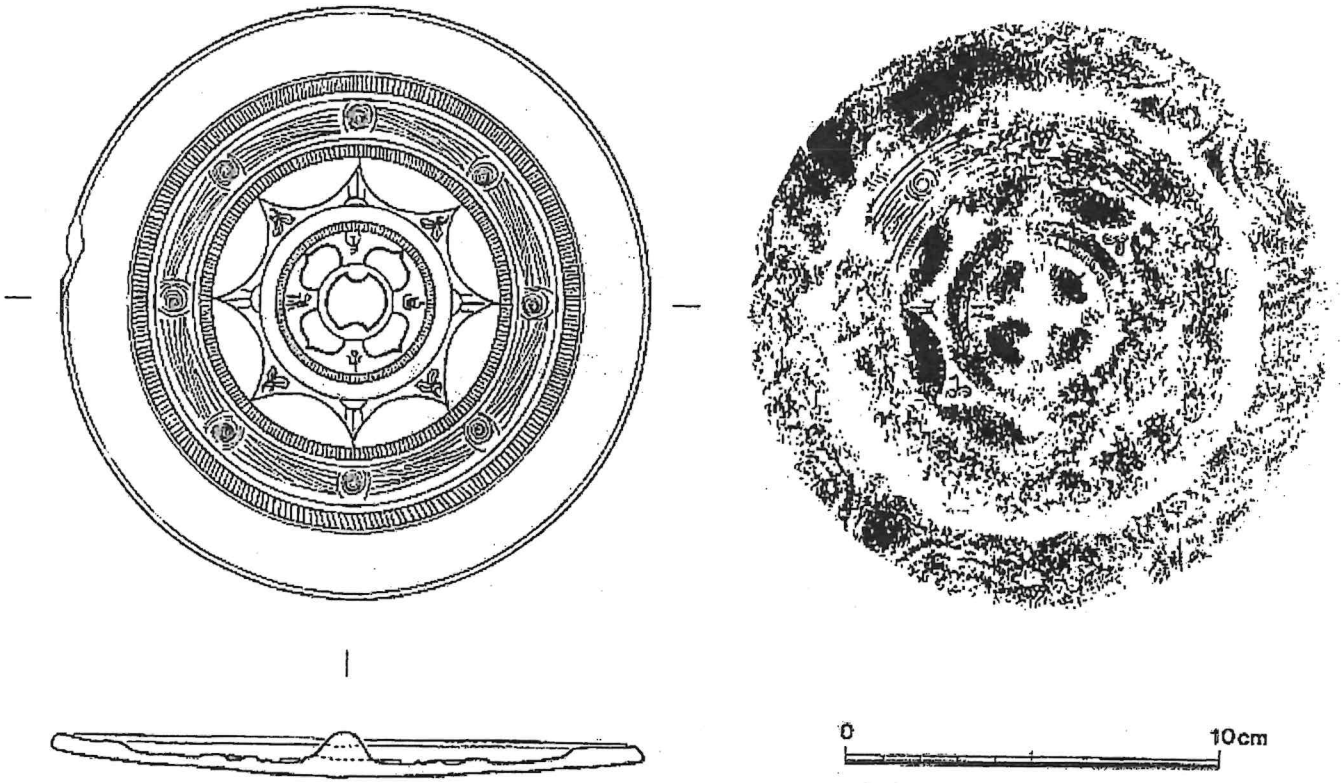
(33) 山口信義（編書），2010『蒲生石棺群－長行田町線道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告 11－』『北九州市埋蔵文化財調査報告書』第 425 集

(34) 栗山伸司（編書），1986『郷屋遺跡－北九州市小倉南区長尾 6 丁目所在－』『北九州市埋蔵文化財調査報告書』第 44 集，財団法人北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室

(35) 田頭喬・山中英彦，1986「北九州市，長行の郷屋古墳－田頭喬考古資料整理報告 2－」『古文化談叢』第 16 集，九州古文化研究会

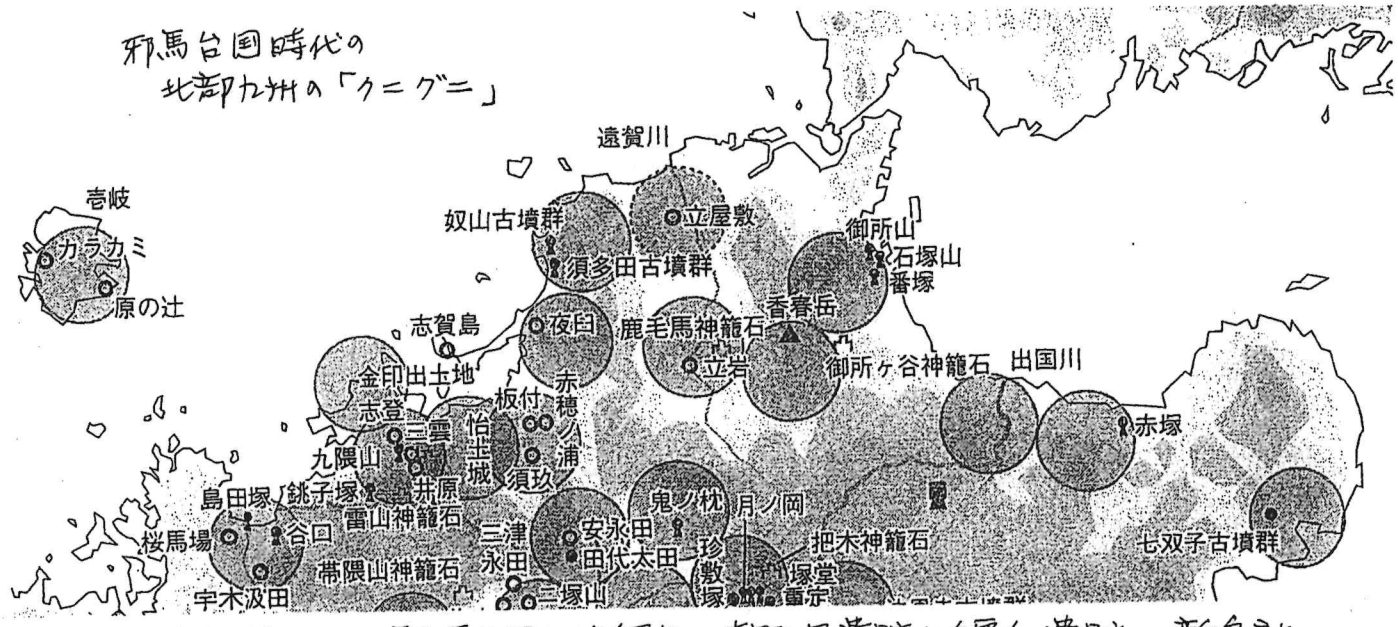
(36) 宇野慎敏（編著），1994『山崎八ヶ尻墳墓群』『北九州市埋蔵文化財調査報告書』第 158 集

(37) 宇野慎敏，2011「古墳時代における畿内と北部九州－4・5 世紀の有力首長にみる変革とその背景－」由良大和古代文化研究協会『研究紀要』第 16 集

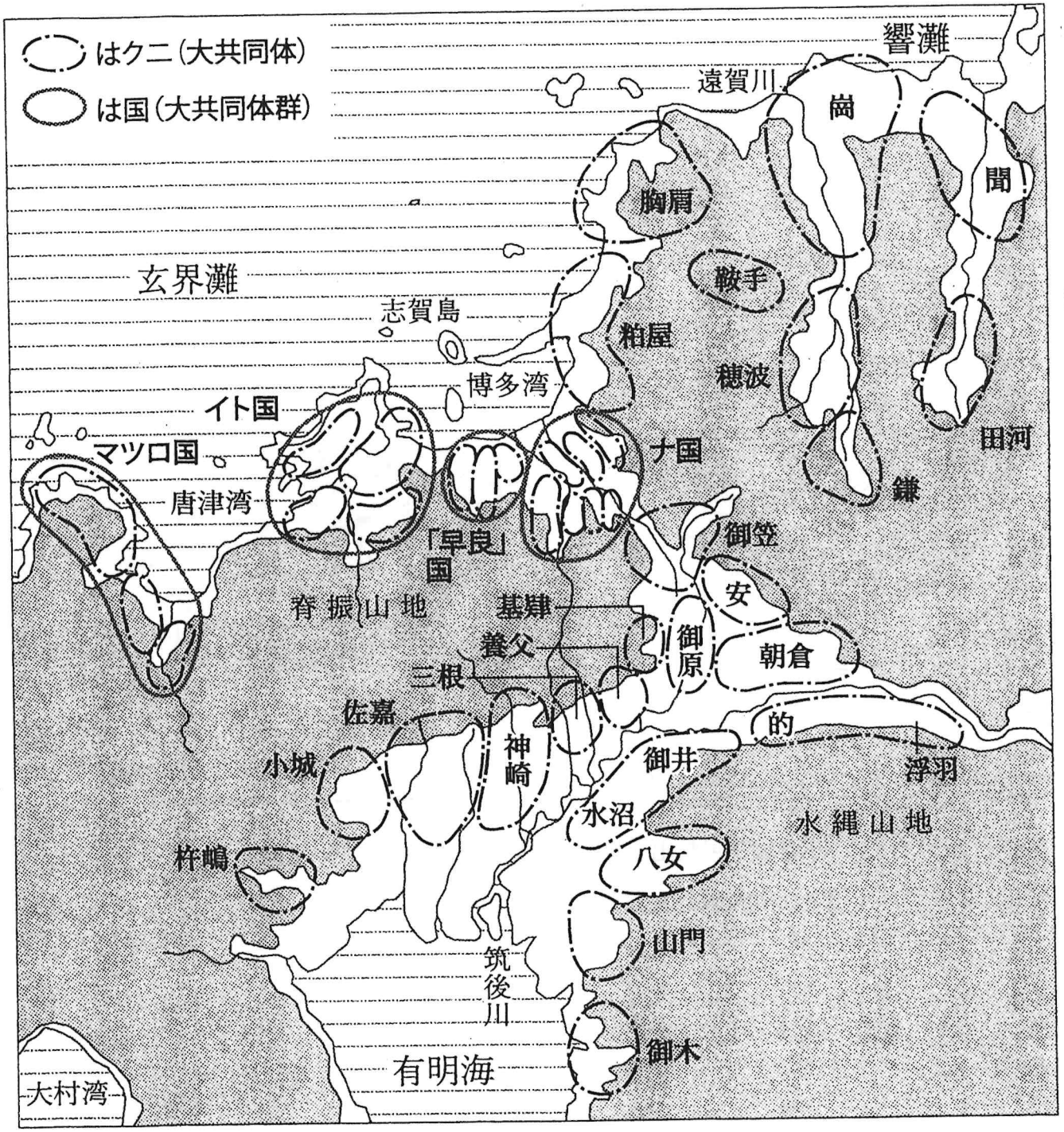


小倉城下屋敷出土長宜子孫内行花文鏡実測図・拓影

（『北九州市埋蔵文化財調査報告書』第 222 集より）



石野博信 編，2012『邪馬台国とは何か　吉野ヶ里遺跡と纒向遺跡』新泉社



寺澤薫、二〇一六「王権はいかに誕生したか」『纒向発見と邪馬台国の全貌』KADOKAWA

紀元前後の北部九州の部族的国家群

朝日新聞（夕刊）　1996年（平成8年）2月9日　金曜日

文化

重留遺跡住居跡から広形銅矛出土

祭祀形態の解明深める

首長級の司祭者が居住か
掘り出しての使用裏づけ
「企救」国存在の可能性も

西谷　正
九州大教授

一月下旬、北九州市小倉南区の重留遺跡において、弥生時代後期後半（二世紀後半ごろ）の竪穴式住居跡の内部から、初めて広形銅矛が一つ見つかった。これまでほとんどが集落から離れた丘陵斜面や谷頭の近く、あるいは海辺などで出土しており、住居跡からは出土例がなかった。

広形銅矛といえば、形態こそ矛という武器形をしているが、実用の武器ではなく、武器形祭器と呼ばれる。そして、九州北部を中心に、四国西南部や瀬戸内中部まで広く分布している。

広形銅矛は、長崎県・対馬で石棺墓に副葬された例はあるが、一般には土坑に埋納された状態で単独もしくは他の青銅器と共伴して出土する。その場合、農業・漁業・航海にかかわる豊穣（ほうじょう）・多獲・安全祈願の集団祭祀（さいし）に使用され、終了した後に、神聖な場所に埋納されたと考えられる。

□　□

さて、銅矛を埋納した住居跡は一見して大形である。約八㍍×六㍍の長方形で、一辺でいえば、普通の住居跡の一・五～二倍ほどの規模である。

また、住居跡内部の中央のよく焼けた炉跡の周囲には、祭祀ともかかわった炭が広範囲に広がっているので、ここは祭祀建物でもあったと推測する。この点に関連しては、徳島市の矢野遺跡のような大規模な集落遺跡内の中央から見つかった銅鐸（どうたく）埋納の場合には、その上部に棟持柱のある建物があったという点が参考になろう。

さらに、重留遺跡の住居跡からは、日常的な生活用具である土器がかなり出土していて、生活の場でもあった。そうすると、ここに居住した人物は、埋納銅矛の管理者であるとともに、銅矛祭祀の司祭者であった可能性が高い。その場合、一つの集落あるいはそれを超えた地域の首長層であったと考える。

もう一つ重要なことは、調査を担当された北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室の谷口俊治・山手誠治両氏によると、銅矛の埋納遺構は少なくとも一回掘り出されて、二回埋納されているという点である。これまで銅矛の埋納遺構に関しては、「祭祀を行うに当たり、掘り出して使用した」という見解もあったが、初めてそのことが裏づけられたことになる。

□　□

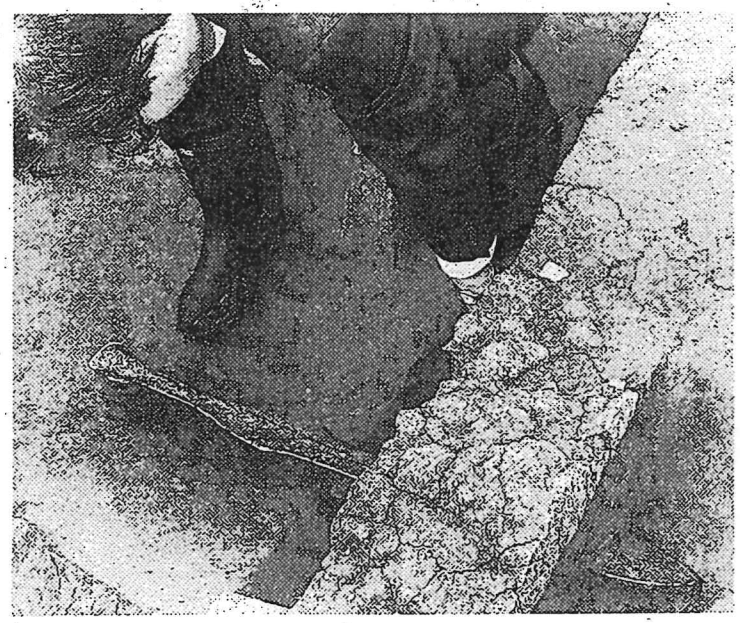
ところで、このたび銅矛を出土した重留遺跡は、現在の北九州市の中心部を北流して響灘に入る紫川の中流域に当たる。

紫川の中流域では、縄文時代晩期後半から稲作が開始されているが、弥生時代の前期末から中期前半のころになると、集落遺跡は爆発的に増加し、後期へと継続する。そして、中期には石器製作のセンターのような遺跡があったり、後期には鉄製品が豊富に出土したりする。さらに、重留遺跡のすぐ東南は、竹馬川を下って周防灘に通じる。中期になって、たとえば分銅形土製品など、瀬戸内西部につながる要素も認められるようになるのは、そのような地理景観と無縁ではない。

このように、重留遺跡を中間域として、紫川や竹馬川の流域平野を包括する地域社会において、重留遺跡で見られた銅矛祭祀は重要な位置を占めたと思われる。この地域社会に対して、遺跡・遺物をトータルに総合し、合わせてここが律令時代の企救郡に相当することを考慮すると、そこに「企救」国の想定も可能になってこよう。後期後半といえば、邪馬台国や倭国の乱の時代とも重なる。

『魏志』倭人伝には、もちろん銅矛祭祀のことは何一つ記していない。重留遺跡の銅矛祭祀は、地形環境から考えて、本来的には農業祭祀に関連すると思われるが、倭国の乱の時期であって見れば、地域の安泰、ひょっとして戦勝の祈願など、多様な祭祀に使用されたかもしれない。

このたびの発見は、銅矛祭祀という重要な事象に関し、確固とした情報を提供したわけで、こんご弥生時代研究史の一ページを飾るとともに、邪馬台国時代の地域史の解明にとっても、議論の対象となり得るであろう。



住居に「埋納」された状態で出土した銅矛＝北九州市小倉南区重住二丁目の重留遺跡で

埋蔵文化財 hiroba

遺跡からのメッセージ

(公財)北九州市芸術文化振興財団
埋蔵文化財調査室　学芸員
梅﨑恵司　Keiji Umezaki

弥生のムラ
―上徳力遺跡―

北九州市小倉南区徳力3丁目付近に所在する上徳力遺跡第1地点ほかはモノレール建設に伴い1982（昭和57）年に初めて発掘されました。その内容から弥生時代研究者の中で「北九州市の吉野ヶ里」と呼ばれています。南北に流れる紫川の東岸にあり、これまでの発掘で、食事を取ったり寝たりする場所の中心である竪穴住居、お米などの食糧を蓄えておく倉庫としての掘立柱建物、子供用の埋葬施設である土器棺墓、大人用埋葬施設である方形周溝墓があり、これらの施設は環濠に囲まれていたのです。これを弥生時代の環濠集落と呼んでいます。

住居や環濠からは大量の土器や石器・鉄器などが出土したことから、非日常的で特別なマツリの跡を予測させました。それらは素焼きで、煮炊きをするための甕、食べ物などを蓄えておく壺、食べ物などを盛るための高坏などでした。しかも環濠から出てきた土器は完全な形をし、まだ使えるものが多かったのです。この他に鉄鎌、鉄鏃、石庖丁なども完形品でした。

2016（平成28）年に志井川流域で初めて調査した第27地点（写真1）でも環濠が3条、確認されました。この環濠の東側は志井川の川原ですから、西側に住居などがあったようです。今回の環濠からも土器が多く出土しています（写真2）。また、環濠とは別に確認された自然流路からは木製品や柱材が出土しました（写真3）。

これらの年代は弥生時代後期終末です。ですからこれまでの調査範囲を合わせた環濠集落の範囲は数百メートル四方になります。

このように上徳力遺跡は弥生時代のムラの様子をよく残していました。

この他、同じ時期で弥生時代の国の一つと考えられる「企救国」の中心的なムラである城野遺跡や重留遺跡などが城野駅付近で近年明らかになっています。米作りを主としたムラが造られ、順調に発展した結果、弥生時代の後半の紫川流域には15余りのムラがありました。こうした遺跡は、開発に伴い発掘され、出土したたくさんの土器や石器が小倉北区金田にある埋蔵文化財センターに収蔵され、一部は展示されています。

それでは、皆さんのお越しをお待ちしています。

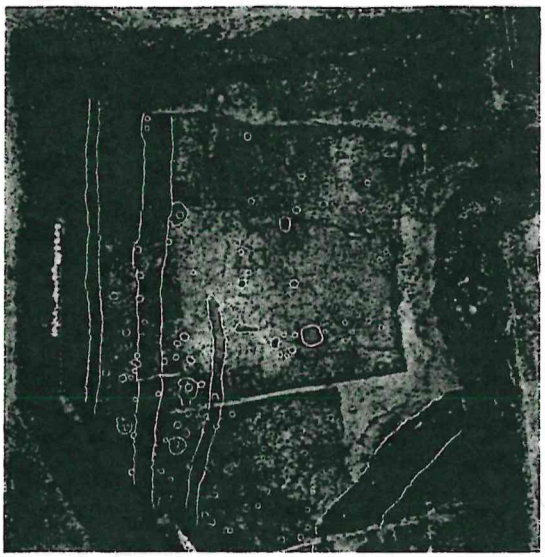


写真1　上徳力遺跡第27地点全景

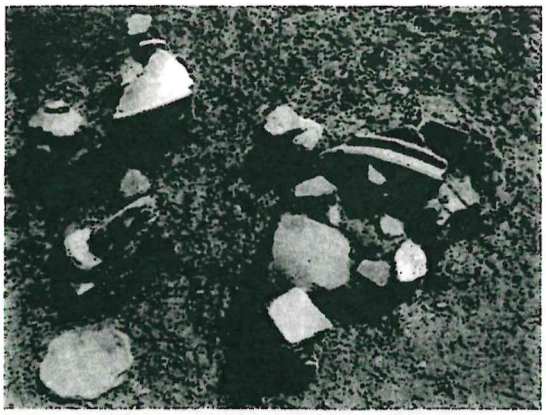


写真2　2号環濠出土弥生終末の土器（西から撮影）

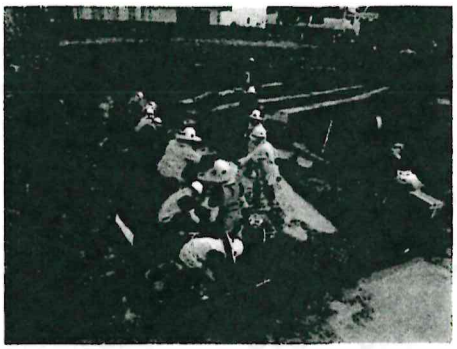
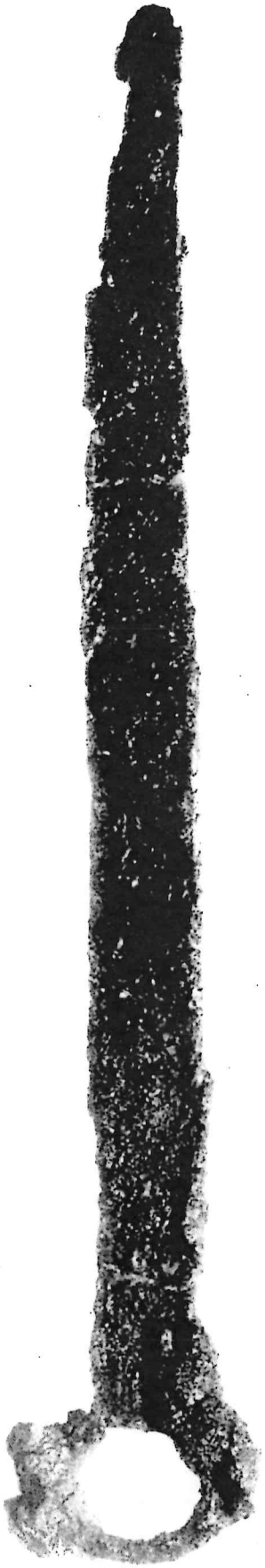


写真3　調査状況（南から撮影）

Cul Cul かるかる Vol. 53　2017. 9.

北九州市立考古博物館，1990『紫川―弥生・古墳時代の風景―』第8回特別展（図録）

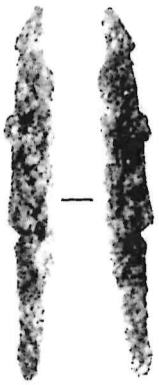
郷屋古墳出土遺物



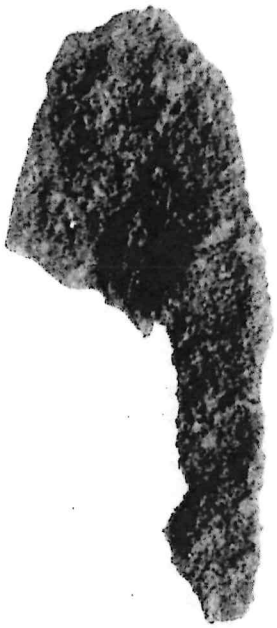
4. 素環頭刀（½）
（2号石棺）

3. 三角縁四禽鏡（⅔）（2号石棺）

2. 貝輪（⅔）（1号石棺）



1. 刀子（⅔）
（1号石棺）



5. 鉄鏃（約⅔）（4号石棺）

田頭喬・山中英彦，1986「北九州市・長行の郷屋古墳—田頭喬考古資料整理報告 2—」『古文化談叢』第16集，九州古文化研究会